ヘンリ・ナウエンのグリーフ・ワーク
―母の生と死、そして復活の物語―

朴　　シ　ネ

はじめに

大切な人の死は遺された人にとって受け入れがたいものである。長寿を全うし、大往生といわれるような人の死であっても、その人の子にしてみれば、親の死はなかなか受け入れられないものである。なおさら最愛の母の苦しみに満ちた死をどのように受け入れるべきか。敬虔なキリスト者として人々を愛し愛されてきた慈愛なる母の安らぎのない死を、どのように受け入れるべきか。ナウエンは母の死という未知なる事態を説明してくれる新たな言葉を必死に探し求める。ナウエンはキリスト教的霊性に深く根差した、しかし、新しく甦らせた言葉で母の死を物語る。ナウエンは、母の臨終の苦しみにイエス・キリストの苦しみを重ねることによって、母の生と死の意味を深く捉えていく。

大切な存在の死は深い苦痛のあまりに、その苦しさの向こうにあるものに気づくことがむずかしい。しかし、ナウエンは、これまで見過ごされてきた死の向こう側に光を当て、生の神秘的な深みへと我々を誘う。大切な存在の死の深い悲しみを通過しながら紡ぎ出した愛と希望の言葉を持って、ナウエンは母の死を物語るのである。

1. ヘンリ・ナウエンという人

ヘンリ・ナウエンは、マザー・テレサと共に20世紀人類に与えられた偉大なキリスト教的霊性の指導者として知られている。ノートルダム、イェール、ハーバードなどの有名大学で牧会心理学を講じた教授であったナウエンは、40冊以上の著作を残した著名な著作家でもある。しかし、それ以上に、常に人々と直接関わる現場の牧会者としての生き方を貫いた[1)]。さらに、弱い立場に立たされている人々に寄りそって積極的に関わり、南米の貧しい人々のために宣教師として働き、また、人生の最後の時をラルシュ共同体（L'Arche Community）[2)]で障がいを持つ人々の友として共に生活した。なお、ナウエンは、カトリック教会の司祭でありながら、他の宗派、他の宗教の人々、さらに、無神論者たちとも交わり、交流を深めていたボーダーのない人生を生きた人物でもある。

1－1　傷ついた癒し人

『傷ついた癒し人』（1972年）はナウエンの代表作であり、彼の全ての著作の中て最も広く知られており、今日に至るまで、宗派を問わず多くの神学校の推薦図書になっている。ナウエンは「牧師であること」の本質を問うこの本で、牧師は自分の傷を認めることを恐れず、自分の傷をこそ癒しのよりどころとしなければならないと述べる。すなわち、心に傷のある人を癒すには、牧師自身が深

い苦悩を感じて傷ついていることが必要だというのである。この本でナウエンがはじめて示した「傷ついた癒し人」という概念は彼を表す代表的な言葉となった[3)]。

1－2　なぜ、ナウエンなのか

まず、ナウエンはキリスト教霊性の長い伝統を受け継いだ人であり、むしろそれを現代に甦らせた人である[4)]。キリスト教的霊性に深く根差した、しかし、新しく紡ぎ出した母の死の物語を通して、生と死の意味を深く捉えていくことができるであろう。次に、著名な著述家であり、学者でありながらも、常に現場で働いた牧会者であったナウエンを通して、知的な空間で暗号化された言葉ではなく、日常の中で肉化された言葉で語られる生と死の神秘に触れることができるであろう。さらに、母の死に深く傷ついたナウエンは、自分の喪失の苦痛を顕著させて、同じ苦しみの中にある我々を自分が経験した希望の道へと誘ってくれるであろう。母の死を通して、傷ついた人として、同じく傷ついた人々に語りかける、ナウエンの癒しの物語に耳を傾けたい。

2. なぜ、ナウエンは母の死を物語るのか

2－1　今まで経験したことのない重大な出来事としての母の死

ナウエンにとって母の死は「今まで経験したことのない全く違った感覚」をもたらした。母が危篤であるという連絡を受け、ニューヨークから母のいるアムステルダムに向う機上での心境をナウエンは詳細に記している。「わたくしをとりまくものが、色あせて消えていくようにみえたとき、自分の感覚が、普段とは違って感じられた」、「ときの流れも走り抜けるようにあっというまに過ぎていったように感じる反面、また、ときが止まったように、ゆっくりと起こった」[5)] できごとであったという。ナウエンは「これまでとは違う孤独」を感じる。「わたくしは孤独でした。淋しいのでも、気が沈んでいるのでも、心騒ぐのでも、怖いのでもなく、ただ、これまでとは違う孤独を感じておりました」[6)] という。

大切な存在の死の前で、我々は今までとは違ったやり方で、現実を直視し、感じるようになる。生の根源的な局面に立たされて、我々は何が本質的なことで、何がそうでないかを見分けることができるようになる。母が臨終を迎えている。ナウエンが今から直面せざるをえないのは、これまで経験したことのない、全く新しい何かがわが身に起こっているという現実だった。この局面は、ナウエンにとっては今まで経験したことのない重大な出来事であるが、日常は何も変わることなく流れている。母の死はただありふれたもう一つの死として忘れ去られようとしている。

2－2　母の死を物語る新しい言葉を見つけたい

> 「ご愁傷さまでございます」。
> 「はい、さみしくなりました」。
> このようなきりのない会話は、慰めというよりは、これまで感じたことのない、疲労感をもたらすことも多かったのです[7)]。

母の死。あまりにも大きなことが起こった。だけど繰り返し語られる言葉はあまりにも一元的で、陳腐な言葉ばかりであった。お悔やみをいう人々に、母の死について機械的に説明しながら、ナウエンは疲れを感じる。「あまり意味のないこのような言葉を、いくたび、口にしたか分からないほどです。なぜこのような意味のない言葉を、くりかえさなければならないのでしょう。こうした言葉はなにも説明してくれません。さらにいけないことは、このような言葉は、なにかをひとに伝えるというよりは、大事なことを隠してしまう気がします。そのような言葉を口にするたびに、わたくしは思いました。あの神秘、あらたに明らかにされたヴィジョンそのものを、なぜうまく伝えることができないのだろうかと。あのとき、あの神秘、あたらしいヴィジョンに、わたくし自身が与っていたのです」[8)]。

ナウエンは、語れば語るほど平凡になり、大切な何かを覆い隠してしまう死についての陳腐な言説ではなく、よりよい物語が欲しかった。たいへんに重大な、何かが起こったので、いままで口にしてきたようなわずかの言葉では、とてもそのことを言い尽くすことが出来ないのだと感じる。少なくとも、もうすこし言葉を尽くして語るよう、つとめなければならないと感じていた。そのような「言葉を尽くして語る」ための努力は、ナウエンにとって「骨の折れる難しいこと」であったという。けれども、「書かないことはもっといけないこと」であり、「書かないということは悼まないということ、心の痛みを感じないということ、それは、母との永別のつらさを身にしみて感じないということ」[9)] だというナウエンは、母の死と向きあい、母の死を物語ってくれる言葉を見つけようと必死に努力する。

2－3　父のための、人々のための、実は自分のための物語

ナウエンは「母を失うという経験を、もっと深く自分のものとして生きたい」[10)] と思い、深く愛した母の生と死について語りはじめる。また、自分と同じ苦しい経験している父に、自分の痛みと彼の痛みを結びあわせることを通して、慰めと安らぎとをもたらすために。さらにかつてナウエンが抱えていたのと同じ問いかけを今抱えている人々のために、どうしても書かれなければならなかったのだという[11)]。このような思いでナウエンは母の生と死についての2冊の本―『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』（聖公会出版、2003年）、『慰めの手紙』（聖公会出版、2001年）―を書くことになるが、いったん書きはじめてみると「自分がいかに多くのことを感じ、いかに多くのことを語りたく思い、またいかに多くのことを母の死後六ヶ月のあいだ隠しもっていたか」[12)] ということに気づかされる 。特に父を慰めようと書いた9通の手紙を集めて出版した2冊目の本『慰めの手紙』は、確かに父に宛てたものだったが、結局自分に向けて書いたものであったし、この手紙を書き終えたときにナウエンは大きな安らぎと慰めを得た。この手紙は父、または多くの読者に語るというよりも、自分自身に語って聞かせた「母の死の物語」であり、その物語る作業はナウエンにとって癒しの作業（＝グリーフワーク）であったことに違いない。

3. 母の死を物語る

3－1　なぜ、このように苦しいのか

ナウエンは、母の死を物語る前にまず母の死によって動揺する自分の感情に注目する。これまで

ナウエンは、司祭として、大人の人間として、多くの死を目睹してきた。しかし、ナウエンにとって母の死は全く異質の出来事であった。なぜ、このように苦しいのか。なぜ、愛する人の死は、我々を動揺させるのか。ナウエンはその理由を愛から見つけだす。愛する存在だからこそ、別れは苦しいのである。愛という言葉には「充分」という形容詞が合わない。充分すぎるほど多くの愛を受けてきたからこそ、愛の存在の不在が受け入れられないのである。

> ほんの少しでもいいから（中略）愛する人と心を通わせたいと望む人間の願望は、なんとつよいものなのでしょう―三十年、四十年、五十年の年月をともに暮らし、数え切れないほどの会話や話しあいを重ね、無数の時間をなごやかに交歓し、それでもなお、いまひとたび、なにか印を、と望んでしまうのです[13]。

ナウエンにとって、母の死がこれまで経験してきた多くの死と全く異なる経験であった理由は、愛のゆえであった。永遠の愛の結晶体であるはずの母の存在が、「こんなにも徹底的に、とりかえしのつかないやりかたで離れていくこと」[14]を認めることができなかったからである。ナウエンだけではなく、76歳にもなったナウエンの父も、今になってはじめて死の意味について考えるようになったという。母への愛、母からの愛に対して、現実の死の不条理は最も理解しがたい事態であった。

> 愛―深い人間の愛―は死を知らないからなのです。（中略）ほんとうの愛は語ります。「永遠に」と。愛はいつも永遠に向かって手をさしのべるでしょう。愛はわたしたちの中の、死が入りこみ得ない場所からきます。愛は時間、日々、週や月、年、世紀といった限界を受け入れません。時によってとらわれることを、愛は望まないのです[15]。

しかし、愛のゆえに受け入れがたかった母の死は、愛によって克服できるものであった。ナウエンは、永遠に消えることのない母の愛を自覚することによって、母の死後もなお母を「これまで以上にわたくしのそば近くにいる」と感じており、「母は、本当に、わたくしの存在そのものの一部になってしまっていた」[16]という。愛は死よりも強く、愛によって結ばれた存在は、死の隔たりを超えて、わたしの心の中で以前より強く、より深く、より鮮明に実在することを我々は知っている。

大切な存在の死の悲しみとその超克を描いた小説『テラビシアにかける橋』[17]で主人公の少年は、親友の突然の死を受け入れられなくてもがき苦しむが、その傷や痛みを通して少年は新たなビジョンへと進んでいく。その力を提供するのは、まさに親友の死であり、絶えず少年に話しかける存在は、彼の中に今なお生きている親友の存在であった。少年は死よりも強い愛の力によって親友と死を乗り越え、親友とより強く結ばれているのである[18]。

死別の苦しみにとらわれて、死によって開かれる門をあける機会を失ってしまわないように、我々の愛する人は我々を招くのである。彼らの死は我々に自由をもたらしてくれる。死別の苦しみを癒してくれるのは、ほかならぬ死者そのものである。

> （前略）自由を、おかあさんの死がもたらしてくれます。そしてその自由はわたしたちに、おかあさんの愛は死なない愛、死ぬことができない愛の反映であることを（中略）深く気づかせてくれるのです[19]。

3－2　母の臨終の苦しみをキリストの苦しみと重ねる

ナウエンは愛のゆえに苦しかった母の死を、愛のゆえに克服する。決して死によって終わることのない母の愛という絶対的な信頼の上で母の死を物語る。ナウエンにとって母の死は受け入れがたい苦痛そのものであった。人間的にも、信仰的にもすばらしい歩みをしてきた愛すべき人はおだやかな死を迎えるはず、死の準備をしてきた人は安らかな死を迎えるはずという漠然たる期待が完全に裏切られてしまったからである。母の最期はとても苦しかった。

> 母の人生は、与えることのできるものはすべて与えるという言葉につきる、美しく、穏やかな、寛容な人生でした。そのような人生が、安らぎのない、苦痛にみちた、責めさいなまれるような苦しみで終わるなどとは、決してありえないことです。平和に生きるひとは平和な臨終を迎えるはず。信仰篤いひとは静かな臨終を迎えるはず。愛すべき人は穏やかな臨終を迎えるはず。しかし、これは真実でしょうか[20]。

ナウエンは人間的にも信仰的にも良き人生を歩んできた母の苦しい最期に大変混乱した。良き人は良き臨終を迎えるはずと、単純な公平律を言いたて、論理的結末を公式化している自分の矛盾を自覚しながらも、最愛の母がこれほどまでの苦痛にみちた闘いに臨む姿を見ることは、ナウエンにとって耐えがたいものであった[21]。

ナウエンは母の苦しみの理由を神に問い続ける。「なぜ、なぜ、わたくしたちは、これまで善良で、穏やかで、やさしく、愛情にみちた一生を過ごしてきた女性が、このような苦痛や苦悶に責めさいなまれるようすをみることになるのでしょう。なぜ、このように寛容で、もてるものすべてをささげてきた母のようなひとが、このようにおおきな苦しみに悩まなければならないのでしょう。この苦しみ、この受難、この苦闘には、いったいどのような意味があるのでしょうか」[22]。

ナウエンはこの母の苦しい最期を語るべき言葉を一所懸命に探しつつ、母の死と向き合う。やがてナウエンは母の臨終の苦しみにイエス・キリストの苦しみを重ねることで母の苦しい臨終の意味を見いだす。愛に生きたイエス・キリストよりも大きな受難を受けた人はいない。イエス・キリストに倣い、多くの愛を実践してきた母は「キリストの十字架の苦しみすらも、ともにわかちあうようにと、主に召されていた」[23] とナウエンは気づかされるのである。

さらに、苦しんでいる母に何もできなく、自分の無力を嘆きながら、同時に心の中でみなぎる力を感じる。この相反する感情についてナウエンは「自分が無力で、ちいさく、心細いと感じる一方で、同時に、心安らぎ、活力にあふれ、穏やか」でもあったという。すなわち、このことは「無力なのに力みなぎり、悲しいのに安らぎにみち、悲しく心つぶれそうなのに心健やか」[24] といった状態であって、この時のことをナウエンはこのような自分がこれまで見たことも感じたこともないなにかを見つめ、それを感じ、真理によって心が解放され、自由でいられたという。だから母の臨終の場に居合わせた時間を彼は、神にささげられた「聖なる時」であったと表現する。そのような生の深い神秘に触れられたナウエンは「いままでとはまったく違った人間」になったという[25]。このまったく新しき世界、見慣れない風景が我々を、永遠を思い知らせる道へと導く。すべてが一瞬にして変わってしまう。母の死はナウエンにとって全てのことを変えてしまった回心のような経験であった。母の死は愛するものたちにこのような回心を持たせるための死であったことにナウエンはようやく気づかされるのである。

3－3　キリストと共に苦しみ、共にその栄光をも受ける

さらに、ナウエンは、母の臨終の苦しみにキリストの苦しみを重ねるだけではなく、キリストの栄光の出来事に母を招き入れることによって、母の死の意味を深く、広く捉えていく。

> この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒になって証ししてくださいます。もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。
>
> （ローマの信徒への手紙 8 章 16 ～ 17 節）

神を信じ、神の声を聞き従う神の子供であれば、キリストの苦難だけではなく、その栄光をも受けると聖書には記されている。ナウエンはこの言葉を次のように受け入れる。イエス・キリストの死後、送ってくださると約束してくださった聖霊を、イエス・キリストの死によってだけではなく、我々と強い愛の絆で結ばれている人が我々のもとから逝くたびごとに、送ってくださっている。すなわちイエス・キリストの死によってだけではなく、母の死においても、残された人々を助け、導くために、神は聖霊を送ってくださるということである[26]。

ここで、聖霊とは、キリスト教的な神学において父と息子と共にもう一つの実態をなす、三位一体の神の 3 つの位格の一つである。「神の子供」である人々を助け、導きく「助け主」であり、すべての真理を悟らせる真理の霊である。イエス・キリストは自分の死後、助け主である聖霊をお送りくださると約束する。その聖霊はイエス・キリストの「話したすべてのことを思い起こさせてくださる」し、いつも共にいて、あなたがたを導き、助けるので、「私がさっていくことは、あなた方にとって益なのだ」とイエス・キリストはいう。

> 助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。
>
> （ヨハネによる福音書 14 章 26 節［新改譯］）

> しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。
>
> （ヨハネによる福音書 16 章 7 節［新改譯］）

このような「助け主」をたった一人、イエス･キリストの死によってだけではなく、母の死によっても送ってくださるとナウエンはいう。このことは、母が、この世で生きていた時よりも、より深く、より近くにいるということを意味する。「神の子供」として生きていた人は、自分の死を通して、自分の愛する人々のために「助け主＝聖霊」を送りだすことに預かられている。これは、ナウエンによって語られた死の向こうにある大きな神秘の物語である。

このような物語は、ナウエンの最後の著作の一つである『アダム：神の愛する子』[27] においても記されている。ナウエンは『アダム：神の愛する子』において、ラルシュで 14 カ月間寝食を共にした重度の障害を持った一人の人間アダムの人生を、イエス・キリストの人生と重ね合わせて語って

いる。イエス・キリストを通してアダムを語り、アダムを通してイエス・キリストを語る。アダムはこの世の一般的な価値観から言えば、最も弱い存在であった。しかしナウエンは、そのアダムにイエス・キリストを見いだした。ナウエンはアダムと神学議論をしたのではない。ただアダムの口に食べ物を運び続ける日常の営みの中で、イエス･キリストの現臨に触れるのであった。そして、アダムの死後、ナウエンはアダムの聖霊の臨在を感じ、平安と希望と愛に満たされるのであった[28)]。ナウエンは、イエス・キリストが過去の人物で、一度この世に来られて、その生を終えた存在ではなく、今も、なお、我々の中で弱い人の姿で生きているという。イエス・キリストは我々の中にアダムのように、最も弱い姿で現れる。ナウエンは、我々に「あなたのアダムは誰なのか」と問いかける。

同じく、ナウエンは、イエス・キリストの苦難、死、復活の物語を母のそれと重ね合わせる。そのことによって、母の死は終わりではなく、新たなはじまりとしての意味を持つ。イエス・キリストと共に苦しみを経験した母は、イエス・キリストと共に死に、また復活の栄光にも共に預かっているとナウエンは語っている。

新約聖書はイエス･キリストの弟子たちによるグリーフワークの記録として読むこともできる。イエス・キリストを愛し、従っていた弟子たちは、自分たちの先生の死によって深く挫折し、苦しむが、復活したイエス・キリストに会い、さらにイエス・キリストが送ってくださった聖霊に満たされ、以前よりも増して力強くイエス・キリストの生と死、さらに復活について述べ伝えるものとなる。このような物語を過去にあった、たった一回の歴史的な出来事として封じてしまうことをナウエンは拒む。このような出来事は、今、ここでも、我々の愛した人の死によって繰り返し起こっているとナウエンはいうのである。イエス・キリストは、今、ここで、母という名で、アダムという名で、我々と共に生き、そして我々のために死に、これ以上苦しむことも、亡くなることもない姿で我々と共にいる。

この物語はわたしにとって大いに慰めを与えるものであった。弟の突然の死は、わたしにとって大きな苦しみとしてずっと凍結されていた。弟を、お墓の中で永遠に眠っている死者としてのみ捉えていたかもしれない。しかし、振り返ってみると、弟はいつもわたしと共にいた。わたしはいつも弟と共にいた。彼の存在によって、わたしは彼の死の以前とは全く違った人間になった。わたしを変えたのは弟であり、弟は今もなお良き力を持ってわたしの中で生きつづけている。最も弱い存在であったアダムの人生をキリストの生と死に重ね、最も苦しかった母の死をキリストの苦難に重ねて物語ったナウエンが、わたしに弟の死を愛と希望の言葉であらたに物語るように勇気づけてくれるのである。

4. 母の「生と死そして復活の物語」を生きる

4－1 母の死をよいものと受け止める

ナウエンは、母の人生が本当にわたしたちのために生きたものであるならば、母の死をもわたしたちのための死として、喜びをもって受け止めなければならないという。すなわち、母が生きていた時にそうであったように、母の死はわたしたちを「強めてくれる死として、より大きな自由を与え、より深い成熟を与えてくれる死として」受け止めなければならないという。このようなナウエ

ンの母の死に対する見方に抵抗を感じることもありうるであろう。大切な人の死をよいものにしてしまうことは、いくらなんでも酷すぎると感じる人もいるかもしれない。しかし、ナウエンがここまで強く、母の死をよいもの、わたしたちを生かすかためのものであると言い切る理由は、そのことまで受け入れなければ、母の人生の意味を完全に理解したことにはならないからだという。ナウエンはこのことが真実であると深く信じており、批判されることを恐れず、確信を持って言っているのである[29]。

> もっと強く表現するとすれば、おかあさんの死はよいものであり、おかあさんはわたしたちを生かすために死んだのだと信じる勇気を、もたなければならないのです。これはとても過激なものの見方ですから、そんなことを言われると感受性を傷つけられると思う人もあることでしょう。なぜ、そう思うのでしょうか。それはわたしが実際に、「おかあさんが離れ去ったのはよいことで、そこまで受け入れなければおかあさんの人生の意味を完全に理解したことにはならない」と言っているからです[30]。

このようなナウエンの主張は、母の死をイエス・キリストの死と復活の出来事に重ねることによって紡ぎ出した「物語」に基づくものであり、また、自分の経験によってその「物語」が真実であると確信しているからである。ナウエンは「母の死」が「悲しみだけではなく喜びを、痛みだけではなくいやしを、喪失の経験だけではなく発見の経験をもたらすことができるものとしておかあさんの死をとらえるように」[31] と自分を招いているという。そして、ナウエンはその招きに応えて、母の死を喜び、母の死によって癒され、母の死の経験によって多くのものを発見するようになる。これらのよいものをもたらすことができるものとして母の死を捉えることによって、「母の死はよいもので、母はわたしたちを生かすために死んだ」と勇気と確信を持って言えるのである。

> おかあさんはあなた、こどもたち、その他多くの人たちのために死んだ、という事実を実感できるのであれば、わたしたちの死がわたしたちに対してもつ意味は、もっと大きくなるだろうと思います[32]。

もしも、わたしにとって大切な人の死を、わたしを生かすための死であると認めることができれば、その死の持つ意味ははるかに大きなものになるであろう。ナウエンは、母の死を「よいもの」「わたしのためのもの」と意味づけることによって、回心ともいうべき大きな変化を成し遂げる。イエス・キリストが自分たちのために死んだということを確信したことによって弟子たちの人生が新たな使命に向けて大きく変わったことのように、ナウエンは母の死を自分のためのものへと意味づけることによって、大きく変わるのである。

4－2　母の死の学校で学ぶ

それでは、母の死は、ナウエンをどのように変えたのか。

まず、母の死は、ナウエンのこれまでの人生すべてを評価し直すために、ナウエンを立ち止まらせ、ふりかえらせた[33]。母の死はナウエンに新しい目を与え、ナウエンのこれまでの人生を見つめることができるようにしてくれた。その結果、自分の人生において多くの非本質的な側面と数少な

い本質的要素とを区別することができるようなったとナウエンはいう[34]。実際に、ナウエンは母の死後、自分がいるべき場所はどこなのかを真剣に問いかける。社会的な地位や人々からの評価、自己実現の満足を与えてくれるが、内面は酷く疲弊してしまう大学を離れて、障がいを持つ人と持たない人が、共に生活するラルシュ共同体に入り、その一員として最後の人生を過ごす決断をする力は、母の死によって与えられたということができるであろう。

次に、ナウエンは母の死によって、よりはっきりと死そのものについて考えるようになった。母は全人生をにおいて、多くのことを教えてくれた。しかし、母は死によってさらに多くのことを教えようとしているとナウエンはいう。

> 過去をふりかえり、死がいつも人生の中に存在しつづけていたことや、多くの別れやさよならの言葉がまさにこの暗い時を指し示していたのだと知ったのも、そのあとでした。そして死の意味ということをまったく新しいかたちで考えるようになったのも、そのあとだったのです[35]。

ナウエンはこのような経験から、人間にとって避けることができない死を、十分に健康であるからこそ考えること、そして死に備えることはとても大切なことだと述べる。「死の危機にさらされる前に死と向き合うこと、そして全力を注いで死とたたかわねばならなくなる前にわたしたちの死について考えることが必要です。（中略）致命的な病を負ったのちにはじめて考えるのでは、必要とする助けを得ることはできないでしょう」[36]。

母の死によって、ナウエンは今まで経験したことのないようなかたちで死に直面させられている。このような事態を、ナウエンは死の挑戦として受け入れ、その挑戦に応じている。しかし、ナウエンはできれば、死がはるかに遠くにある時にこそ死と向き合うべきだという。なぜならば、もし死を見知らぬ脅迫者ではなく、親しいゲストとすることができるのであれば、我々の人生はあきらかにより自由な、より豊かなものへと変わるであろうとナウエンはいう[37]。このことは母の死によって、母の死の学校で学んだナウエンによる、死の教育への提言であると言えるであろう。

さらに、ナウエンは母の死によって、同じ境遇におかれている苦しむ他者としての父と共に苦しみ、労わりあうという新たな関係性を築くことができるようになる。ナウエンは長い人生において、母とは対照的な性格の、強くて強圧的であった父との関係において難しさを感じていた。父の厳しい規律や出世志向に対して大きな隔たりを感じて、独立自主の精神の父親に一種の近寄り難さを持っていた。そのような父の影響を強く受けたナウエンは、「愛情への限りない飢えや愛されないことへの恐れから、他者から評価されることへの過敏といってよいほどのこだわりが生まれた。そして、些細な批判や態度によって容易に傷つき、羞恥心や屈辱感といった感覚が醸成されていったのである。ナウエンは、そのような自己の精神生活を心の傷として捉えていた」[38]のである。

しかし、母の死後、父との距離は一気に縮まる。近寄りがたかった父の存在に一種の親近感を感じはじめるようになったのである。この感情は、父とナウエンがこの世界で一番大切な存在を失ったという共通の事実に基づくものであった。その悲しみが分かり合えなかった父と子を、分かり合えるようにしてくれたのである。この二人は、今、自分たちがどれほど孤独で、悲しいか、言葉で

お互いに言い表す必要がない。今、わたしが感じている、まさにそのものを、相手も感じている。ナウエンは父と共に母の死の前に立たされており、母の死の前で二人はまったくおなじであり、その等しさを恵であると感じていた。

> 父とのあいだには、これまでとはちがった親近感がうまれました。それは、賢いものが愚かな者に、老いた者が若い者に、経験のある者が経験のない者に語りかける、といったものではありません。賢いとか、賢くないとか、老いているとか、若いとか、あるいは成熟しているとか、未熟であるとか、そのようなこととはまったくかかわりのないことでした。わたくしたちは、ここでは、死を前にして、まったくおなじであり、その等しさを恵であると感じていたのでした[39]。

我々はすべて例外なく共に自らの死を宣告された存在であり、同時に自分にとって大切な存在の死が突如とやってくるのを免れない存在である。誰一人例外なく必ず訪れる死を、今ここで抱え込んでいる者同士の共苦を通して、我々はまた互いに労り合う可能性に同時に開かれるのである。

> このような他者への労りによって、愛は呼び起こされる。すなわち、死ぬ存在である厳然たる事実への自覚によって、他者の意味は、たとえ根本的には分かりあえない存在ではあっても、わたしと同じ根源的な苦しみを持つ存在へと変わっていく。苦しみながらも今を生きている他者を、大事にしてあげたい、一生懸命に支えてあげたいという強い心のかたむきが、労りによって触発される愛である。ここでいう愛とは、今、この時を精一杯生きている他者の有り様に対するわたしからの精一杯の応答である。この愛は、死を運命づけられている我々が絶望的な現実に等しく貫かれながらも、永遠の今を共に生きる他者に捧げる最も大きな贈り物なのである[40]。

おわりに

ナウエンはキリスト教的言説の中で、しかし新たに生み出された自分の言葉で、母の死を物語る。その物語の中で、愛する存在だからこそ苦しかった母の死を、死によって滅ぶことのない愛の自覚によって受け入れる。また、母の苦しみに満ちた最期を、イエス・キリストの苦難に重ねることによって意味を見いだし、母がイエス・キリストの苦難だけではなく、その栄光にも預かることを信じることによって、母の喪失の悲しみを克服できる希望を見つける。さらに、今もなおナウエンと共にいて、支え導く母の存在に気づくことによって以前よりも強く生きていく力が与えられる。

物語を通して母の死をよいものと受け止めるナウエンは、母の死によって大きく変えられる。まず、自分の人生における非本質的な側面と本質的要素とを区別することができるようになり、新たな歩みへと進み出ることができるようになる。次に、死を見知らぬ脅迫者ではなく、親しいゲストとすることによって、より自由でより豊かな人生を歩むことができるようになる。さらに、ナウエンは母の死によって、同じ境遇におかれている苦しむ他者としての父と共に苦しみ、労わりあうという新たな関係性を築くことができるようになる。

このように、ナウエンは母の死をただ理不尽で、不条理なものに凍結してしまうのではなく、キリスト教の信仰の中で新たに紡ぎ出された物語によって、生を脅かす死から豊かな生の神秘を見いだすのである。

注

1）William Ruddle. *Henry Nouwen: Wounded Healer*. Grove Books Ltd, 2005. =『헨리 나우웬 : 상처받은 인간·상처입은 치유자』이은실역 , 서울 : 비아 , 2015 년（ラドル、ウィリアム『ヘンリ・ナウエン：傷ついた人間・傷ついた癒し人』ソウル：ビア、2015 年）；小渕春夫緒「ナウエンの人間理解とアプローチ：人々を閃きに導く」平山正実・堀肇編著『ヘンリ・ナウエンに学ぶ：共苦と希望』聖学院大学出版会、2014 年、48 頁。

2）ラルシュ共同体（L'Arche Community）は、1964 年にジャン・バニエにより設立された、精神的・肉体的障がいを持つ人を核心メンバーとして、世界各国から集まった様々な人々が共に生きるコミュニティーである。ナウエンはラルシュのカナダ・トロント支部で、1996 年心臓麻痺で亡くなるまでの 10 年間、一人のメンバーとして、障がいを持つ人々の世話をしながら、彼らと共に生きた（Michail O'laughlin. *God's Beloved: A Spiritual Biography of Henri Nouwen*. Benedict Press, 2008.）。

3）前掲書『ヘンリ・ナウエン：傷ついた人間・傷ついた癒し人』74 ～ 75 頁。

4）前掲書「ナウエンの人間理解とアプローチ：人々を閃きに導く」48 頁。

5）Henry Nouwen. *In Memoriam*. Notre Dame: Ave Maria Press, 1980.=『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』多ヶ谷有子訳、聖公会出版、2003 年、10 頁。

6）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』10 ～ 11 頁。

7）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』5 頁。

8）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』5 頁。

9）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』3 頁。

10）Henry Nouwen. *A Letter of Consolation*. San Francisco: HarperSanFrancisco, 1982. =『慰めの手紙』秋葉晴彦訳、聖公会出版、4 頁。

11）前掲書『慰めの手紙』4 ～ 6 頁。

12）前掲書『慰めの手紙』5 頁。

13）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』60 頁。

14）前掲書『慰めの手紙』39 頁。

15）前掲書『慰めの手紙』38 ～ 39 頁。

16）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』91 頁。

17）Paterson, Katherine. *Bridge to terabithia*. New York: HarperCollins, 1977. =『テラビシアにかける橋』岡本浜江訳、偕成社、2007 年。パターソン，キャサリン『テラビシアにかける橋』岡本浜江訳、偕成社、2007 年。

18）朴シネ『死の力：死と向き合う教育』晃洋書房、2015 年、92 頁。

19）前掲書『慰めの手紙』43 頁。

20）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』26 頁。

21）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』26 ～ 27 頁。

22）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』36 頁。

23）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』38 ～ 39 頁。

24）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』31 ～ 32 頁。

25）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』71 頁。

26）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』88 頁。

27）Henry Nouwen. *Adam, God's beloved*. Maryknoll, N.Y.: Orbis Books, 1997.=『アダム：神の愛する子』宮本憲訳、聖公会出版、2013 年。

28）前掲書『アダム：神の愛する子』；徳田信「現代聖餐論におけるキリストのからだ：ヘンリ・ナウエンを中心に」『基督教研究』第 80 巻第 2 号、基督教研究会、2018 年、41 頁。

29）前掲書『慰めの手紙』73 ～ 74 頁。
30）前掲書『慰めの手紙』74 頁。
31）前掲書『慰めの手紙』75 頁。
32）前掲書『慰めの手紙』70 頁。
33）前掲書『慰めの手紙』50 頁。
34）前掲書『慰めの手紙』51 頁。
35）前掲書『慰めの手紙』55 ～ 56 頁。
36）前掲書『慰めの手紙』34 頁。
37）前掲書『慰めの手紙』36 ～ 37 頁。
38）黒鳥偉作・平山正実緒「境界線を生きる人ナウエン：心の軌跡と共苦の姿勢から学ぶ」平山正実・堀肇編著『ヘンリ・ナウエンに学ぶ：共苦と希望』聖学院大学出版会、2014 年、85 頁。
39）前掲書『母の死と祈り：魂の暗夜をこえて』63 頁。
40）前掲書『死の力：死と向き合う教育』160 ～ 161 頁。

（同志社大学キリスト教文化センター講師）